

バナート生まれの作家

リヒャルト・ヴァーグナーについて¹⁾

小 泉 淳 二

- 目 次：Ⅰ. バナート : 序／故郷／減少／消失
Ⅱ. ルーマニア：名前／自由／逮捕／抑圧
Ⅲ. ドイツ : 代償／発掘／展望／註

Ⅰ. バナート：

序： リヒャルト・ヴァーグナーは1952年4月10日生まれ。ルーマニアのバナート地方、ロヴリンという村の出身である。母語はドイツ語。ドイツ人少数民族、いわゆる「ルーマニア＝ドイツ人」(Rumäniendeutsche)の一員として、チャウシェスク政権下で文筆活動を行ってきたが、85年秋、言論の自由を選び、国外退去を申請。その後、旅券が発給されるまで約1年半、作品公表と職業従事を禁じられた。87年3月、同郷の作家であり、配偶者でもあったヘルタ・ミュラー(1953-)とともに出国。以来、西ベルリンに居を定め、44歳の現在に至るまで、同地を拠点として作家活動を続けている。

これまで出版された著作は、詩と散文を中心に22(9)冊。内訳は、詩集8(6)、小品・短編集4(2)、中・長編小説5(0)、エッセイ集1(0)、童話集1(1)、ルーマニア、東欧に関する論考3(0)となっている。カッコ内の数字は出国前に刊行された冊数である。これらの数字を比べると、出国を境に創作の重心が、詩から散文へ、ゆっくり移りつつあるようにも見えるが、実際に読んでみると、もともと詩人として出発した本来の資質が、安易な変貌をみずからに許しているわけではなさそうだ。

この論文では、まず、バナート生まれのドイツ語作家という、彼がおかれて

いる特殊な立場に目を向ける。そして、その前提となっているルーマニアの国内情勢についても、必要に応じて言及する。そのうえで、出国後にドイツで発表された、おもな散文作品に視点を転じてゆく²⁾。

故郷： はじめに、ヴァーグナーの立場が端的に示されている一節を、彼の小説『ウィーンの土石流』のなかから抜き出しておこう。エンジニアという設定になってはいるが、作者とほぼ等身大の主人公が、旅先のウィーンで初対面の女子学生に声をかけ、喫茶店に誘う場面である。かつての恋人に似ているので思わず声をかけたものの、いざテーブルを挟んで向かい合ってみると、なにを話していいか分からない。すると相手の女のほうが、あなたの正体を当ててみましょうか、と申し出て、次のような会話が交わされる。

30台の終わりでしょ。ハンガリー人で、作家。当たったかしら？

こう云うと彼女 [=女子学生] は笑った。

彼 [=主人公] は、あっけにとられて彼女を見つめた。

30台半ばだよ。彼はむきになって云った。それにドイツ人だし、エンジニアだ。

でも、ドイツ人の話しかたじゃないわ。彼女は云った。外国人みたい。あなたのドイツ語は非の打ちどころがないけど、ドイツ人のじゃないわよ。ドイツ人が、どんなふう to ドイツ語をしゃべるか、わたし知ってるもの。

彼はコーヒーをかきまぜた。これがメランジュというやつだな。

ルーマニア生まれなんだ。彼は云った。

ふーん、ルーマニア人なの。

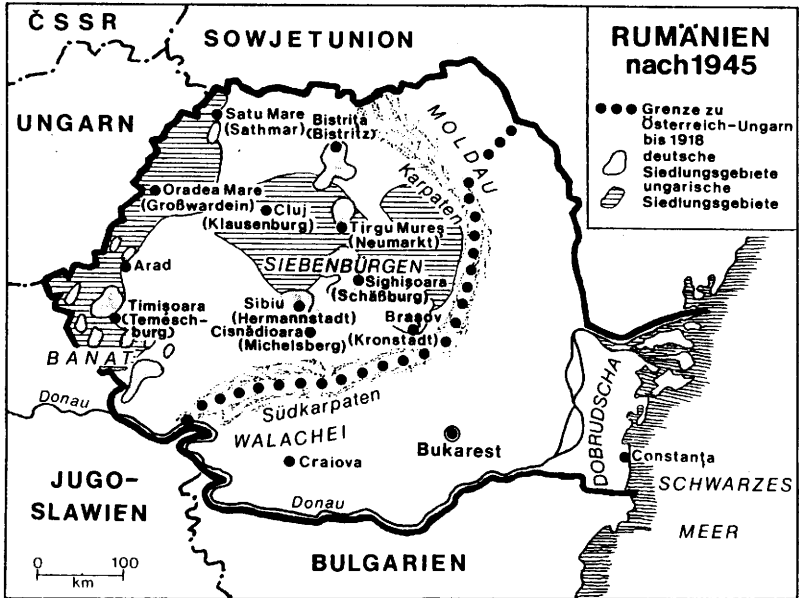
いや、バナートのシュヴァーベン人なんだ。

彼女は大きな声で笑い、バナート、と叫んだ。

うん、1918年までは二重帝国領だったんだよ。

じゃ、やっぱりハンガリー人ね。思った通りだわ。ほんとにエンジニアかどうかは、訊かないことにしてあげる。そうは見えないけどね。^{M48}

ヴァーグナーは生涯の最初の35年間を、ルーマニアでドイツ人として生きてきた。しかしドイツへ逃れてからは、同じドイツ民族の一員でありながら、ドイツ人とは見なされない。生まれを明かせばルーマニア人と見なされる。故郷



の由来を語ろうとすれば、こともあろうにハンガリー人と見なされてしまう。どうあっても西側のドイツ人社会に溶け込めない、厄介な状況におかれているのである。

では、彼のふるさと、バナートとは、いったいどこにあるのだろう。上に地図を示しておいた。ルーマニアとユーゴスラヴィアにまたがる、この微妙な地域について、以下、要点のみを記しておこう³⁾。

バナートは、もともと15世紀まではハンガリー王国領であった。その後、オスマン帝国に支配されたが、1718年にオーストリア領（帝国直轄領）となった。そして、マリア・テレジアが女帝として君臨した時代に、多数のドイツ人が入植し、農業や手工業にたずさわることになったのである。彼らの出身地は、シュヴァーベン、ロートリンゲン、ティロール、シュタイアーマルク、その他、さまざまであったが、それがどこであれ、彼らは一括して「シュヴァーベン人」(Banater Schwaben, Donauschwaben)と呼ばれている。呼び名をめぐるこうした事情は、12世紀以来ジーベンビュルゲン(＝トランシルヴァニア)に入植したドイツ人が、ひとしなみに「ザクセン人」(Siebenbürger Sachsen)と呼

ばれているのと同様である。

その後、バナートは、1779年にハンガリー領となり、1867年以降はオーストリア＝ハンガリー二重帝国領。第一次大戦後、1920年のトリアノン条約によって、およそ $2/3$ がルーマニア領に、残りがユーゴスラヴィア領に編入され、現在に至っている。分割当時のバナート地方の人口比は、ドイツ人 $1/3$ 、ハンガリー人 $1/3$ 、ルーマニア人 $1/6$ 、セルビア人 $1/6$ であったといわれている。

この条約によって成立した、いわゆる「大ルーマニア」では、バナート、ジーベンピュルゲンの両地方を中心に、少数民族としてのドイツ人が国内人口の4%強を占め、1930年代には80万人近くに達したという。ところが、第二次大戦後の1950年には40万人に減り、最近、1991年の時点では20万人しか残っていない。一説によれば、わずか10万人ともいわれている。しかも、その半数以上が50歳を越える高齢者で、若い世代のほとんどは、ドイツないしオーストリアへの出国を強く希望している。ということは、ルーマニアにおけるドイツ人少数民族は、まもなく消え去ろうとしているのだ。いったいどうしてこのような事態になったのか。次の節では、ルーマニアにおけるドイツ人の減少について、少しばかり触れておこう。

減少： ルーマニアからドイツ人が消えてゆくにあたっては、数多くの抑圧要素が介在し、複雑に絡みあってきたわけだが、おもな要因として以下の三点に絞り込むことができる。

その第一は、「帝国への帰還」(Heim ins Reich!) というスローガンで知られる、1930年代末以来の潮流である。第一次大戦後、東欧各国に取り残されたドイツ人は、さまざまな迫害から逃れるため、ナチス＝ドイツに救いを求めざるをえない状況に追い詰められていった。ルーマニアでは、39年8月に独ソ不可侵条約が結ばれると、ただちにベッサラビア、北ブコヴィナなど、東部地域から大量のドイツ人が、ナチス＝ドイツに移住している。そして43年5月になると、ルーマニアのドイツ人のうち、7万人以上がドイツ軍に志願。その大半は武装親衛隊に所属した。戦死者は2万人。生存者の一部は戦後、ドイツにそのまま残留したという。

第二点は、スターリンの「共同責任テーゼ」に基づく強制労働である。これによって1945年1月から5年間、ルーマニアのドイツ人男女、約9万人がソ連

国内の強制収容所に送り込まれ、過酷な労働を強いられた。死亡者数は5千人以上というばかりで、その輪郭すら定かではないが、生存者のかなりの部分が西側への退去を許されたため、ルーマニアへ帰還した者は当初の半数に満たない。この時点でルーマニア国内のドイツ人は、およそ40万人にまで減り、やがて西側、とくにドイツ連邦共和国とのあいだで、引き裂かれた「家族の引き合わせ」(Familienzusammenführung)が、解決を要する問題として浮上してくるのである。

作品に描かれているところから推察すると、ヴァーグナーの父親はドイツ兵としてではなく、ルーマニア兵として東部戦線で戦ったらしい⁴⁾。しかし戦後は、やはりドイツ人であったがために、ウラルの鉱山で強制労働に服している^{B170c}。母親に関しては、44年9月、祖母とともにソ連兵に連行されたと書かれているが^{B174}、実際に強制収容所に送り込まれたかどうかは明らかでない。母方の叔父は、ルーマニア軍を嫌ってドイツ軍に志願。西部戦線で負傷し、戦後はオーストリアで暮らしているとのことである^{B219, M64}。いっぽう、ヴァーグナーの妻の父親は、ナチスの武装親衛隊に入隊し、戦後46年まで英軍の捕虜となったのち、ルーマニアに帰還した。また彼女の母親は、ソ連の強制収容所生活を体験させられている^{B153}。作品のなかの設定とはいえ、ヴァーグナーの場合、いずれも自伝的色彩が極めて濃厚であるし、彼とともに出国した妻ヘルタ・ミュラーの作品と照らし合わせても、重なり合う部分が随所に見られるので、ほぼ事実と見てまちがいなさそうである⁵⁾。

以上に述べた二つの要因は、しかしながら、ヴァーグナーやミュラーの両親の世代の、いわば受難であろう。もちろん、この世代が第二次大戦前後になめさせられた苦難は、このほかに、50年代に強いられた、ドナウ河口の不毛の地、バラガン＝ステップへの強制移住など、数え上げればきりが無い。だが、ルーマニアにおけるドイツ人の減少に、致命的な最後の一撃を加えたのは、第三の要因として次に挙げる、西ドイツ政府による移住者受け入れ措置であった。

これは1978年、シュミット首相率いる当時の西ドイツ政府が、いわゆる「家族の引き合わせ」を図るために、膨大な額の対外債務をかかえるチャウシェスク政権と結んだ協定によるもので、以後、毎年1万1千～1万5千人のルーマニア＝ドイツ人が、西ドイツへ国外退去していった。そのさい西ドイツ政府は、退去者1人当たり8千～1万マルクをルーマニア政府に支払っている。チャウシェスク政権最後の年、89年には2万3千人が出国。ヴァーグナー自身が苦い

筆致で綴っているとおり、「飢餓輸出」とまでいわれた、あの無謀な食料輸出政策が強行された暗澹たる時代に、「国を捨てることができる者は、みんな、しまいには沈みゆく船を見捨てるかのように、去っていった」⁶⁾のである。

チャウシェスクが銃殺された同年12月末、残留ドイツ人22万人のうち7万人が出国申請を済ませ、順番を待っているという数字がある。こうした出国熱は、独裁政権の崩壊後、救国戦線評議会が主導権を握ってからも、冷めるどころか、むしろその逆で、ふたたびヴァーグナーの言葉にしたがえば、「多くの、非常に多くのドイツ人が、できるかぎり早い時期の出国を待ち望んでいる。その割合は60ないし80%と見積もられているが、後者の数値のほうが実態に即しているように思われる」。ルーマニアの復興だけでなく、ドイツ人少数民族の存続という点から見ても、「チャウシェスクの失脚は10年遅すぎた」⁷⁾というほかないのである。

消失： ルーマニアに生を享けながら、故郷を捨てざるをえないところまで追い込まれ、ドイツに逃れたヴァーグナーらは、今後、故郷それ自体の消失に立ち会わなければならない。むろん、独裁者に帰せられる責任は、量りがたいほど重い。ヴァーグナーの友人で、やはりバナート生まれの詩人、ロルフ・ボッセルト(1952-86)の『四行詩』(1986)を引いておこう。

明るい耕地に陶器の小人。／わきで工業が地響きを立てる。／山の上には
プラスチックの絞首台。／ひとつの国がゆっくりとくずおれる。⁸⁾

一読して明らかなように、ルーマニアという「明るい耕地」に立つチャウシェスクが、中身の空っぽな「陶器の小人」(Gartenzwerg)にたとえられている。彼は国民の生活、というよりも生命を犠牲にして、工業化をむりやり推し進めるが、乗用車の車体にプラスチックを用いざるをえなかった東ドイツ同様、絞首台をプラスチックでこしらえざるをえない。「山の上」とあるのは、トランシルヴァニア・アルプスの山々を指すのだろう。だとすれば、そこで死刑を執行されるのは、少数民族たるハンガリー人、ドイツ人、そしてロマにほかならない。1971年の「七月テーゼ」公表以来、諸民族の共存を廃し、「均質化」という名目のもとで徹底的な「同化」、つまり「ルーマニア化」政策を強行してきた「総統」(Conducator)こそが、国を、故郷を、滅ぼす張本人なのだ、と

ボッセルトは名指しているのである。

上に引いたボッセルトの詩が、独裁者を激しく糾弾しているとすれば、次に紹介するヴァーグナーの『村の年代記への追記』（1984）は、ドイツ人の村が息絶えてゆく断末魔の瞬間を、淡々とした筆致で描いた小品といえよう。年代記の書き手も村を去り、最後のひとりになってしまった老婆の姿が、共同体のシンボルである教会とともに、村もろとも消えてゆく。そしてヨーロッパの各地に、故郷を失った子孫たちが取り残される。ルーマニア国内で発表されたせいか、あからさまな抗議の姿勢は、やや影を潜めているが、それだけに深い悲しみが埋め込まれている文章である。

犬が吠えてる。盗賊かしら？ それに、訊く相手がいたらの話だけど、いたい今年は何年なの？ おばあさんは起き上がり、たんすに向かう。と、たんすは炎に包まれている。燃えている戸を開き、ハンガーをつかむ。と、それは灰と化していて、手のなかで粉々に崩れる。燃え尽きた服を無理やり身にまとい、通りに出る。と、おばあさんの背後に、もはや通りは存在しない。教会へ向かう。教会に入る。らせん階段をのぼる。と、おばあさんの背後に、もはや階段は存在しない。オルガンのところまでのぼりつめ、燃えている扉を背中ごしに閉めた。以来、おばあさんの姿は、もはや見えない。ただ、音だけが聴こえる。燃えるオルガンから響く、たったひとつの音だけが。いっぽう、おばあさんの親類たちは、大陸のあちらこちらに散らばって、ガソリンスタンドや、ベルトコンベアのわきに立っていた。ふと、彼らは、ふるさとのほうを見やる。と、ときたま、あの音が頭のなかに残っているような気がするのだ。⁹⁾

ルーマニアに関するヴァーグナーの論考を読むと、彼の非難の矛先は、チャウシェスク個人にのみ向けられているわけでは決してない。むしろ、ひたすら腕をこまねいたまま独裁者の誕生を許してしまった、周囲の人間たちの責任が問われている。「党幹部、官僚、軍人、彼らはひたすら傍観していたのだ。知識人たちも同じく、ひたすら傍観していたのだ」¹⁰⁾。ヴァーグナーが作家として活動しようとしたときには、次の章で述べるように、すでに手遅れであった。おそらくはここに、彼の作品につきまとうて離れない、強烈な無力感、絶望感が由来するのであろう。いたって言葉数の少ない、干からびたような彼の詩の

なかから、『手紙』(1991)と題された一篇を選んでみた。内容については次の章の最初の節で、あらためて触れることにしたい。

ねむりのなか、／銀のトネリコの／あせた一葉。／
 異郷の春が／すぎてゆく。／
 とうさんは小舟を塗ってます。／別の国から／母が書く。／
 だれも乗ることはない、／あの小舟。¹¹⁾

II. ルーマニア：

名前： ヴァーグナーが生まれた村ロヴリンは、ルーマニアの西はずれにある。というよりはむしろ、1989年12月16日の蜂起で知られる県都テメシュヴァール(=ティミショアラ)の北西約40キロ、といったほうが分かりやすいかもしれない。ハンガリーとの国境までわずか20キロ。ユーゴスラヴィアとは10数キロ。国境地域の村である。ただし彼の両親は現在、ロヴリンから北東へ10キロ離れた隣村、ペリアムに住んでいる。ロヴリンに母親の実家があって、そこで生まれたということなのか、あるいは、いずれかの時期に一家がペリアムへ引っ越したのか、事情は明らかでないが、ロヴリンにしる、ペリアムにしる、彼の両親の幼年時代には、ドイツ人がそれぞれ91%、85%を占める、典型的なドイツ人の村であった。

作品から察すると、ヴァーグナーの父方の曾祖父は、ペリアムの村はずれを西へ流れるアランカ川で、晩年まで漁師として生計を立てていたらしい^{B201}。川べりにあった曾祖父の家は、1970年代の初めに取り壊され、その敷地は、ルーマニア政府関係者の手に渡っているとのことである^{A20}。ヴァーグナーの父親は、チャウシェスクと同じ1918年生まれで^{A20}、製粉場の管理責任者を務めていたことがあったようだが^{F20}、前章の末尾に引用した『手紙』を読み返すと、曾祖父以来、一家にとって、川と小舟が特別の意味をもっていたらしいことが、ほのかに見えてくる。

というのも、このアランカ川は、ユーゴスラヴィア領に入ると、ハンガリーから南下してきたティサ川を合わせ、やがてドナウに流れ込むのである。ドナウを遡れば、遠い遥かな父祖の地、オーストリアとドイツに達しよう。だとすれば川は、ヴァーグナー一家にとって、ドイツ人としてのアイデンティティをつ

なぎとめる、ひと筋の細い糸ではなかったろうか。そしてまた小舟は、ルーマニアとドイツ、二つの国に引き裂かれて暮らす親子を、結びつける象徴ではなかろうか、と考えられるのである。

しかし問題は、この詩の6行目におかれた「塗る」(streichen)という動詞であろう。ふるさとの家の裏庭で父親、70歳を越えた老ヴァーグナー氏が、今や「異郷」にあるひとり息子、リヒャルトの身の上を案じつつ、その昔アランカ川に浮かべて親子で漕いだ、思い出の「小舟」に塗料を「塗る」。「塗る」、「なでる」、「さする」、そして「消し去る」。この動詞が持つ意味を、ひとつずつ数え上げてゆけば、読者の脳裏には、塗ると同時に、小舟をいとおしむように、なで、さする、老父のこまやかな手の動きが浮かび上がってくるだろう。しかし塗れば塗るほど、なで、さすればさするほど、肝心の小舟の姿は、老父の手のひらによって次第に「消し去られて」ゆくのである。ルーマニアとドイツを結びつける象徴が消え去り、ドイツ人としてのアイデンティティをつなぎとめる糸も、断ち切れてしまうように思わずにはいられない。

そもそも「リヒャルト・ヴァーグナー」という、場合によっては非常に紛らわしい名前からしてすでに、なにごとかを物語ってはいないだろうか。ペンネームではない。本名である。ヴァーグナー自身は自分の名前について語ることを、むしろ避けようとしているような節があるが、ドイツの作曲家と同じ名を、あえて息子に与えた彼の「両親にとって、この名前は文化上のアイデンティティのシンボルだったのだろう」¹²⁾と考えられる。だが皮肉なことに、この名前に託されたドイツ人としてのアイデンティティこそが、ルーマニアにおいては抑圧のもととなり、ドイツにおいては疎外のもととなるのである。以下の節では、ヴァーグナーがルーマニアで体験した抑圧に向け、論を進めてゆこう。

自由 ヴァーグナーが青少年期をすごした60年代は、「コントロールされた自由化」の時代と呼ばれている。政府当局の厳重な管理下で容認された、カッコ付きの「自由」ではあったが、1920年以降のルーマニアの歴史のなかでは、もっとも自由な空気が流れた時代である。国内の少数民族に対し、学校、教会、出版、放送などの各方面で、母語の使用が許された。その結果、彼らは、ある程度までではあったにしろ、民族固有の文化を一時的に再生することができたのである。

村の小学校を終えたヴァーグナーは、隣町グロースザンクトニコラウスのド

イツ語リュツェーウム（＝ギムナジウム）に入学。15歳のときから詩を書きはじめる。彼の作品は、「自慢ではなくて本当の話、女子生徒たちのあいだで好評だった」^{F29} という。また、地元のドイツ語新聞には、学校生徒専用の投稿紙面が用意されていて^{A9}、そちらのほうの常連でもあったようだ。思うにヴァーグナーの半生のうちで、いちばん幸せな時期だったのではあるまいか。当時を回顧して彼はこう述べている。「ぼくたちティーン・エイジャーは、カフカ、ヌーヴォー・ロマン、その他、読みたいものを読んでいた。そして、そうすることができる状況を、当たり前のものだと思っていた」¹³⁾。さらに、彼の小説『女たちの手のなかで』には、主人公の次のような言葉がある。「あの頃のぼくは、詩ばかり書いていた。子どもだったあの頃の思い出は、まるで綿菓子のように記憶に残っている」^{F90}。これもまた、作者みずからの述懐であることは、あらためて断るまでもないだろう。

この時代にまつわる回想を、ヴァーグナーの作品のなかから拾い集めてゆくと、西側世界から伝わってくる情報、なかでも若者文化の摂取に一生懸命になっていた、当時のティーン・エイジャーの姿が浮かび上がってくる。短波ラジオのダイヤルを西ベルリンの「RIAS」（アメリカ占領地区放送）や、ミュンヘンの「自由ヨーロッパ放送」に合わせ、ニュース、音楽、そのほかのプログラムに聞き入るときの切実な気持ちは、たとえヴァーグナーと同世代であっても、西側で育ってきた人間には想像すらできないものであったろう^{M25, 114, F58}。オーストリアに住んでいる叔父から贈られた「本物のブルー・ジーンズ」^{M64}を、生まれて初めてはいたときの嬉しさについても、同じことがいえる。ユーゴスラヴィアと接する国境の町、ハッツフェルトまで級友と出かけ、名もないロック・バンドが演奏する『ホンキー・トック・ウィメン』に酔いしれたあと、駅の待合室で始発電車を待ち明かしたこともあったようだ^{M58}。切手収集や、映画館通いに向けられた思春期の情熱も、西側世界に対する憧れの表われであったにちがいない^{A88, M44}。

だが、すでに1965年、ルーマニア共産党中央委員会書記長に就任していたチャウシェスクは、67年から国家元首に相当する国家評議会議長の職を兼任し、「コントロールされた自由化」の舞台裏で、独裁体制の基盤を着々と固めつつあった。確かに、この時代のルーマニアは西ドイツと国交を樹立し、対チェコスロヴァキア軍事介入に異を唱えるなど、その対外政策における「自主路線」が西側陣営から高く評価されていた。しかしながら国内における「自由」は、

この節の冒頭に述べた通り、あくまでもカッコ付きのものでしかなかった。法令によって認められていることが、現実には許されなかったのである。たとえば「拘置所などでは、面会に訪れた家族に母語で話しかけることが、実際には全面的に禁じられていた」¹⁴⁾という。またヴァーグナーらドイツ人生徒は、「自由ヨーロッパ放送」の若者向け音楽番組に宛てた「匿名の」リクエストはがきの投函を、西側からやってくる観光客の手に委ねなければならなかった。それでも後日、彼らは授業中に校長室へ呼び出され、治安警察の尋問にさらされ、密告者としてスパイ活動を行なうよう、脅迫されるのである。

校長先生が部屋から出てドアを閉めると、灰色のスーツに身を包んだ男は、にっこりと微笑み、リクエストはがきに書かれていたとおりの匿名で呼びかけた。そして、もう一度にっこり微笑んでから、こう云うのだった。わたしたちは、なにかも全部、知ってるんだよ。でもね、それを、みんな忘れてあげてもいいんだ。君はまだ、こんなに若いんだもの。みんな忘れてあげる。もし、君が、ほんのちょっぴり、わたしたちに手を貸してくれさえすれば、ね。ほんとに、ちょっとしたことなんだ。そうしたら、わたしたちは、なにかも忘れてあげる。^{F59}

「自由ヨーロッパ放送」で若者向け音楽番組を担当していた人気ディスク・ジョッキーは、「その二、三年後、ミュンヘン市内の公園で不可解な死を遂げた」^{F58}という。「コントロールされた自由化」の中身は、およそ、このようなものでしかなかった。にもかかわらず、たとえカッコ付きであろうとも、のちの70年代以降に比べれば、まだしも「自由」があったのである。髪を長く伸ばしたヴァーグナーの、思春期のおぼつかない足取りは、ローリング・ストーンズの『サティスファクション』や^{M71}、ウッドストック音楽祭など^{M114}、西側の若者文化全体に支えられていた。胸のうちには文学への情熱と、「ブラハの春」に象徴される自由への思いが満ちあふれていた。だが彼は、やがて大きな挫折を味わうことになる。

逮捕： 1971年、テメシュヴァール大学に入学したヴァーグナーは、ドイツ文学とルーマニア文学を学ぶかたわら、新聞の文芸欄や文芸雑誌に作品を発表するようになる。そして翌72年4月、同年輩の5人の詩人とともに出席した座談

会を機に、バナート出身のドイツ人作家グループを結成する。テメシュヴァール大学の現役学生を中心とする、ヴァーグナーら二十歳前後の青年たちは、当時の「現代ドイツ文学」に匹敵する、自分たちの「ドイツ文学」を、自分たちの手によって作り上げようとしたのである。やがて彼らは、「アクツイオンズ グルッペ・バナート」という呼び名を与えられた。「バナート行動隊」とでも訳したらよからうか。この「グルッペ」に関しては、それ自体が一個の文学史的事件であるため、この場で深く立ち入る余裕はないが、ぜひ述べておきたい事柄をまとめると、およそ以下ようになる。

まず、なによりも見落としてならないことは、彼らの企てた文学運動が、同時に政治活動たらざるをえなかったという、いわば悲劇的な巡り合わせであろう。そもそも少数民族たるドイツ人が、みずからの言語による、みずからの文学を主張しようとするならば、諸民族文化の共存共栄が許容されていなければならない。カッコ付きではない自由が、最低限の民主主義が、保証されていなければならないのである。仮にこれが60年代であったなら、あるいはまだ、どうにかなる余地が残されていたかもしれない。しかし、すでに71年にチャウシェスクが「七月テーゼ」を公表し、「コントロールされた自由化」に終止符が打たれたあとでは、もはや一切の望みは断たれていた。ましてや言語という、民族のアイデンティティに直接かかわる芸術領域だけに、少数民族に対する政府の政策変更、すなわち「ルーマニア化」への方向転換は致命的である。彼らは行動を起こした当初から、治安警察によってマークされていた。あらかじめ挫折を運命づけられていたのである。

「グルッペ」のリーダー格はヴァーグナーであった。結成以来のオリジナル・メンバーとして、ウィリアム・トトク（1951-）の名前も挙げておこう。前章で触れたポッセルトは、遅れて参加した有力メンバーである。また、ヘルタ・ミュラーを構成員に数え入れる論者もある。ヘルムート・フラウエンドルファー（1959-）は、「グルッペ」が解散させられてから仲間に加わった詩人だが、のちの経過を考慮すると、以上の5名を、あえて広義の「グルッペ」の主要メンバーと見なしたほうが、かえって有効かもしれない。

彼らを行動に駆り立てていたのは「プラハの春」の精神であった。グラムシ、アルチュセールなどに代表される、西欧マルクス主義の洗礼を受けたヴァーグナーらにとって、諸民族の民主的平等を要求することは、党や国家の利益に反するどころか、むしろ、その逆であった。彼らにとって党員であることと、政

府の政策を批判することは、決して矛盾するものではなかったのである。ヴァーグナーが黨員になったのは、「グルッペ」結成と同じ72年のことであるが、入党の動機について、彼の小説『出国申請』の主人公は、「なんらかの改革を内部から行なうため」だったと述べている。「あの頃、そういうふうを考えていたのは、ほくだけではなかった。多くの者たちが、なにかできるはずだと思っていた」^{A62} という。もともと諸民族の平等と同権は、1965年に公布された新憲法第17条によって、誤解の余地なく明確に保証されていた。それでいながら実際には、体制側の圧力によって無視されていた。だからこそ「グルッペ」のメンバーたちは、党と「国家への忠誠心から発する率直な批判」¹⁶⁾を繰り広げようとした。しかし、その報いはリーダーたちの逮捕であり、「グルッペ」の解散であった。ヴァーグナーはメンバーを代表して、こう書いている。「ぼくたちは、もともと反政府分子ではなかったし、そうなるうと思ったこともなかった。ぼくたちを反政府分子に仕立てあげたもの、それはチャウシェスク政権なのだ。」¹⁶⁾

自由化の時代に育った彼らの目から見ると、70年代以降はまったく異様な時代であり、これが同じ社会、同じ国家であるとは、とても信じられないほどであった。1974年、チャウシェスクは、みずからのために新設した共和国大統領の座に就き、独裁体制を揺るぎないものとする。ヴァーグナー、トトク、ほか「グルッペ」のメンバー計4名が治安警察に逮捕されたのは、翌75年10月11日であった。1週間にわたる執拗な取り調べ、家宅搜索、原稿や日記、書簡、蔵書などの押収ののち、ようやく解放された彼らは、以後6か月間、作品を公表しないことを誓約させられた。それでもなお治安警察は、彼らの誓約の担保として同年11月18日にトトクを再逮捕し、さらに8か月間、未決囚のまま拘留する。こうして「アクツイオンズグルッペ・バナート」は、結成後わずか3年で完全に壊滅させられた。メンバーは散り散りになり、ほぼ70年代の終わりまで沈黙を強いられるのである。

すでにこの年、75年に大学を終えていたヴァーグナーは、まもなく、テメシュヴァールから東へ130キロほど離れた工業の町、フネドアラにドイツ語教員として赴任する。就職というと聞こえがいいが、実のところは体のいい厄介払いであった。ふるさとから離れた、ドイツ人の数少ない町で、およそ3年間、母語としてではなく、第二外国語としてのドイツ語を、ルーマニア人の生徒たちに教える仕事に就いたのである。その後、作家活動を再開してから出国に追い

込まれるまでの経緯は、以下に述べるように『出国申請』の内容と重なり合っている。やや長くなるが、次の節で詳しく見てゆきたい。

抑圧： 1979年、教員生活を切り上げたヴァーグナーは、テメシュヴァールに戻り、ジャーナリスト兼作家として文学活動を再開する。『新バナート新聞』編集員、『カルパチア評論』通信員などを務めるとともに、党が公認しているテメシュヴァール作家協会に加入した。同協会のなかに「アダム・ミュラー＝グッテンブルン」(Adam Müller-Guttenbrunn)と呼ばれる、ドイツ人作家の分会があり、その一員となったのである。かつての「グルッペ」の仲間たちも、ペンを捨てた者や、西ドイツへ国外退去した者を除き、相前後して加わった。だが「グルッペ」のときと同様、3年も経つと、彼らは治安警察による弾圧にさらされ、やがて国内における文筆活動の断念、つまり出国申請に追い込まれてゆくのである。

81年からヴァーグナーは、「アダム・ミュラー＝グッテンブルン」の会長を務めることを許されたが、翌82年5月14日、トクが家宅捜索ののち拘留された事件を機に辞任させられる。そして83年秋、たび重なる治安警察の介入のため、「アダム・ミュラー＝グッテンブルン」そのものから脱会せざるをえなくなり、同年12月には『カルパチア評論』通信員の職も奪われる。しかも、「この国でやっていく、ただひとつの可能性」^{A15f.}と見なしていた『新バナート新聞』編集員のポストまで失い、ついに作家としての息の根を止められるのである。フラウエンドルファー、トク、ヘルタ・ミュラーらも、ほぼ同じような経過をたどる。彼ら4人は84年9月、少数民族に対する抑圧的な政策と治安警察の暴力を弾劾する文書を、テメシュヴァールの党指導部およびルーマニア作家協会に提出したが、無視されたどころか、みずからの立場をますます悪くするばかりであった。結局、職業従事と作品公表を完全に禁じられるかたちで国外退去を申請。ヴァーグナーら4名は87年に出国を許され、西ベルリンに到着するのである。

ヴァーグナーが、妻ヘルタ・ミュラーとともに出国を決意し、国外退去を申請したのは、85年10月のことであった。その後、いつ旅券が発給されるか、いや、そもそも発給されるのかどうか、なにひとつ知らされず、収入を断たれたまま、ひたすら待たされる辛さは、当事者でなければ分かるまい。ようやく87年の初めに申請が認められ、出発が間近に迫ったとき、ヴァーグナーは『出国

申請] (1988)を書き始める。「それは、出国以外に選択の余地がなかったことを示すための物語であった。」¹⁷⁾

翌年、西ドイツで刊行されたこの作品は、ヴァーグナーにとって初めての本格的な小説となった。主人公はシュティルナーという34歳の詩人兼ジャーナリストで、作者と完全に重なり合う人物である。1歳年下の妻ザビーネは、作家という設定にこそなっていないが、そのほかの点ではヘルタ・ミュラーの経歴と、やはり完全に一致する。彼ら夫婦が国外退去を決心するまでを扱ったこの作品は、独裁政権下における言語の喪失を、沈鬱きわまる文章で書き出したものといえよう。その前提を成しているのは、もちろん抑圧である。

この時期にヴァーグナーが受けた抑圧を、あえて整理するならば、作家として受けた一般的な抑圧と、ドイツ人作家として受けた特殊な抑圧、この二種類に分けることができる。もちろん、両者は互いに分かちがたく結びついているのであるが、まずは前者について述べられている断章を引用しよう。

シュティルナーは、このような体制に関与せざるを得ないということを、つくづく思い知らされた。こうした経験は、誰もが身に染みて味わう破目になるのだった。言語を占有している政権のもとでは、意見を表明することなど不可能なのだ。リアリズム文学を書こうと思えば、そう思っていることを口にすると、もうすでに政府の支配領域に立つことになる。なぜかというと、政府もまた、リアリズム文学を要求しているからだ。そして、なにがリアリズムであるかは、政府が決定するのだった。そうなると、こちらがリアリズムだと見なすものは、リアリズムにあらず、ということになり、それは国家に対して叛逆的である、あるいは反社会主義的であると見なされてしまうのだ。言葉はみな、相反する二つの顔をもつことになる。政府は批判的な文学を要求した。過去の遺物は批判されねばならぬというのだ。政府は政治参加の文学を要求した。個々の領域にはまだ欠陥があるというのだ。政府は勇気ある文学を要求した。社会主義にも矛盾は存在するというのだ。政府が求めるものは、つねに現状を肯定する文学だった。われわれに必要なのは建設的な批判であるというのだ。言葉は、もうとうの昔に没収されてしまっていた。道化たちが幕の上があった政治の舞台ではしゃぎ回り、やたらと言葉を撒き散らしていた。¹⁸⁾

作家として、ジャーナリストとして文筆活動を続けるには、政府の指示に従わなければならない。政府の指示に沿って書こうとすれば、文章は空虚になり、もはや書き手のものではなくなってしまう。自己検閲という名のウイルスが脳のなかに巣くい、「文章を書こうとすると、ウイルスもまた、書き手の一部として執筆作業に加わるのだ。そして徐々に文章を浸蝕する」^{A76}。こうして書き手は自分自身の言葉を喪失するのである。

とはいえ、こうした抑圧状況は、ルーマニアに限らず、全体主義国家に共通して見られるものであろう。ある意味では東ドイツの作家がおかれていた状況と変わらない。しかし、ヴァーグナーたち、ルーマニアのドイツ人作家には、もうひとつの抑圧が存在した。次に引用する断章が、そのあたりの事情を語っている。

ドイツ語で書いているシュティルナーにとって、書くという作業は、しばしば翻訳に似たものとなるのだった。彼はドイツ語で考える。だが、世間ではルーマニア語が話されていた。そして彼がある対話を、たとえば市電の車内で耳にした会話を、文章で再現しようとする、それを翻訳しなければならず、そうすると会話もっていた本来の魅力が失われてしまうのだった。とても書き表わせないよ、とドイツ人作家の仲間内で話題になる。ルーマニア人の連中が書けばいいのさ、という話になることもある。でも、奴らときたら、永遠とやらのためにばかり書いてるからなあ。これは連中があくせく努めている、アウラの匂いを撒き散らす、抽象的で芸術至上主義的な作品への当てこすりだった。作家としてシュティルナーは外国人なのである。^{A79}

ヴァーグナーがおかれていた以上のような状況は、抑圧というよりは疎外と呼ぶべきかもしれない。しかし、これがたとえ疎外であるとしても、その状況は、これまで触れてきたように、少数民族に対する抑圧政策という、外部からの圧倒的な力によって規定されているのである。作家として外国人である彼が、抑圧された少数民族の一員であることを忘れてはならない。みずからの言語は、そもそもの初めから脅かされていたのである。

この作品『出国申請』は、「物語」と銘打たれているが、本文132ページのなかに73の詩的断章を収めたもので、決して読みやすいものではない。訳出にあたっては、かなり言葉を補っている。断章と断章、文と文のあいだの空白を埋

めるようにしながら読み進んでゆくと、ヴァーグナーが新聞社のポストを失い、作家として活動できなくなる過程が明らかになるとともに、食料や燃料の絶対的な不足、郵便物の検閲、徹底的な言論統制など、80年代の暗澹たる日常生活が読む者の度肝を抜く。また、ヘルタ・ミュラーに加えられた抑圧も、事実どおりに描かれている^{A31f}。彼女はテメシュヴァールの「テノ金属工場」(Tehnometall)に、通訳兼翻訳者として80年まで勤務していたが、治安警察から要請されたスパイ活動を拒否した結果、職場から排斥されるのである¹⁸⁾。その後、臨時教員として、かつてのヴァーグナーと同じようにドイツ語、つまり外国語教師の職を不定期的に務めるのだが、彼女に課せられた仕事は、「りんご」や「塩」といった基本的な単語を習ってもいない生徒たちに、「農業生産協同組合」(Landwirtschaftliche Produktionsgenossenschaft)、「計画凌駕」(Planüberbietung)という政治的な言葉を覚え込ませることであったという^{A37}。

ルーマニアにおけるグロテスクな状況は、このほかにも、たとえばタイプライターの登録制など、指摘すべきことが数多く残っている。しかし、ここでは『出国申請』の最後の断章を引くことによって、舞台をドイツに移したい。ヴァーグナーとヘルタ・ミュラーが国外退去を決意したのは、先にも述べたように85年10月であるが、この作品のなかでは、次作『歓迎祝金』との連続性を考慮して、86年12月という設定になっている。

そして、それから、あの日がきた。12月の初めだった。ザビーネとシュティルナーは、じゅうぶん思慮を重ねてきた。二人は云った。わたしたちは、もう長いあいだ、じゅうぶん考えに考えてきた。二人は、もう長いあいだ、じゅうぶん我慢に我慢を重ねてきた。ザビーネは33歳。シュティルナーは1歳年上だった。午前だった。二人は朝食を済ませていた。ここには、いかなる意味も存在しなかった。太陽は競技場の向こう側に昇っていた。もうずっと以前から、ここには、いかなる意味も存在しなかったのだ。やがてまた寒くなる。そして次の、吐き気を催す冬がやってくる。そして次の、吐き気を催す大統領の演説がやってくる。次の、辛い歳月がやってくる。次の、ミルクのない数週間が、パンのない毎日が、停電の毎晩が、やってくる。次の、マスメディアのゴミ屑が、やってくる。次の、身分証明書の検査が、次の、屈辱が、そして次の、また次の。もう、じゅうぶんだ。シュティルナーは競技場の向こうに視線を投げた。競技場の向こうには、陰鬱に煙を吐き出している

工業があった。黙りこくった国。彼は立ち上がり、棚からタイプライターを取り出し、テーブルの上ののせると、ふたを外して脇におき、タイプ用紙を2枚、あいだにカーボン紙を挟んでセットし、打ちはじめた。旅券課御中。当申請書をもってわたしたち夫婦は、これを限りの最終的な出国を申請いたします。事由は。^{A137}

作品を締めくくっているピリオドの先には、普通であれば「以下のごとし」という語句が浮かんでこよう。だが実際には、この小説全体が「事由」を成している。つまり蛇足を承知でいえば、「事由は以上のごとし」なのであり、読者を作品の冒頭へ投げ返す仕掛けになっているのである。

Ⅲ. ドイツ：

代償 1987年2月末日、雨のなか、ヴァーグナーは、ふるさとの村と年老いた両親に永遠の別れを告げ、出国の途につく。

ぼくは歩きはじめた。丘をのぼり、村の中心部を抜け、村の向こう側にある駅までの道。この道を、ぼくは数え切れないほど繰り返し、実にさまざまな思いで歩いてきた。ぼくはもう一度振り向いて、丘のふもとに建つ両親の家を見つめた。もう一度、母を見たのだ。母は家の前に立ちつくし、両手をエプロンのポケットに入れたまま、ぼくを、遠ざかる息子を見つめていた。母は手を振らなかった。ぼくも手を振らなかった。別れのあいさつは済んでいた。二人には分かっていたのだ。もう二度と会うことはあるまい。母には分かっていた。ぼくにも分かっていた。けれども二人とも、それを口に出さなかった。母は云わなかった。ぼくも云わなかった。¹⁹⁾

父親はペリアムの駅まで息子を送っていった^{B209}。ヴァーグナーとヘルタ・ミュラーは、途中アラドで列車を乗り換え、ハンガリーとの国境クルティチに到着。同駅構内で通関手続きを済ませてから、待合室で一夜を明かし、午前6時発のオリент急行で国境を越える^{B190 ff.}。そしてニュルンベルク近郊、ツイルンドルフの「通過収容所」(Durchgangslager)で3日間にわたる審査を受けたのち、3月4日、政治亡命者と認定され、「被迫害・強制移住者資格」

(Vertriebenen-Aussiedlereigenschaft)を得る。二人は、西ドイツ政府から交付された「歓迎祝金」^{B163}を手にして、西ベルリンに居を定めるのである。

ヴァーグナーの2冊目の小説『歓迎祝金』(1989)は、『出国申請』と対を成す続編で、前作と同じ主人公夫婦が西ドイツに入国してから、公民権を与えられるまでの半年間を描いている。断章を積み重ねてゆく「物語」のスタイルは、前作と変わらない。テーマについても、やはり言語の喪失であるといえよう。ただし、同じ喪失といっても、前作の場合とは内実が異なっている。また、失われるものは言語ばかりではない。以下、引用を交えながら、そのあたりを探ってみよう。

女友だちが、テーブルに戻ってきて、訊いた。あなたたち夫婦は今、ルーマニア語で話してたでしょ。

いいえ、とザビーネが答えた。どうして？

そんなふうに聞こえたから。女友だちはそう云って、笑った。^{B205}

この論文の最初の引用においても示したことだが、ヴァーグナーたちが話すドイツ語は、発音、アクセント、語彙、表現などの点で、西ドイツで話されている一般のドイツ語と、大きく異なるのである。雑誌記者と向かい合ったときの次のような場面にも、主人公、すなわちヴァーグナーの内心の鬱屈が見てとれる。

ドイツ語とルーマニア語の、どちらが話しやすいですか？

ドイツ語です、とシュティルナーは、すぐさま答えた。そして考えた。こいつめ。そんならルーマニア語は、ドイツ語よりも、もっと下手くそなんだな、と、思っていやがる。^{B205}

そもそも言葉にまつわるこうした問題は、ルーマニアから移住してきたドイツ人すべてに当てはまるものであろう。けれどもヴァーグナーのように、ドイツ語によって生きてきた詩人であってみれば、問題は日常生活のレベルを越え、ドイツ語作家としての存否が問われざるをえない。彼がバナートで、ルーマニア語やハンガリー語など、いくつもの言語に取り囲まれながら用いてきたドイツ語は、実は特殊な性格を帯びた言葉だったのである。

周囲全体が突然、ドイツ語だけになった。シュティルナーにとっては異常な状況だった。彼にとってドイツ語は、プライベートなものだったのだ。仲間内で話すときの言葉であり、ひとりで読書にふけるときの言葉だったのだ。ドイツ語を話せば、世間から身を遠ざけることができた。彼のドイツ語は、新聞の大見出しや、スローガンがもつ猥雑さとは縁がなかった。権力者、有力者たちはルーマニア語をしゃべっていたのだから。事態は一夜にして一変してしまっただ。^{B252}

彼のドイツ語が特殊なものであるならば、いったい彼は今後、誰のために書けばいいのだろうか。作家としての存亡の危機に立たされたヴァーグナーは、主人公とともに自問する。

書くこと。それは、ここドイツでは、ほとんど一切の事柄と無関係であった。シュティルナーにとって、書くことは困難になってきた。書く、そして、どうする？ バナートでは書くことが、いつでも人々と結び付いていた。話しかけることのできる人々。当てこすりや、ほのめかしを理解してくれる人々。同じように考え、彼が何を云っているのか、誰を指しているのか、きっと分かってくれる人々がいた。それから敵がいた。書くことは、権力の陰のもとで行なう、ひそやかな営みだったのだ。ごく些細な向こう見ずな一句に、してやったりと喜んだものだ。しかし今は、知っている人間がひとりもない、未知の国にいるのだった。彼と同じ人間など誰ひとりいない。なるほど彼は、こちらの人間と同じ言葉と話している。だが彼の話しかたは、よそ者の話しかただった。彼の文章は、翻訳された文章のように思われた。彼は書いた。しかし書く目的も、読んでもらう当ても、まったく存在しなかった。彼は今、自分自身の言葉と、たったひとりで向かい合っているのである。^{B159}

ヴァーグナーにとってルーマニアでは、「ドイツ人と見なされることが重要であった」。彼はバナートのドイツ人社会のなかで、ドイツ人としてのアイデンティティに支えられながら、どうにか生き長らえてきたのである。そして、その可能性が、もはや完全に閉ざされたために出国したのであった。ところが、ここ自由の国ドイツに来てみると、彼は同じドイツ人でありながら、異邦人ではありえない。「ここでは、ぼくはルーマニア人なんですわね」^{B265}と主人公シユ

ティルナーは云う。これまで彼の存在の基盤を成してきた帰属意識が、ここでは受け入れられない。そればかりか、かえて新しい社会への適応を妨げるのである。疎外され、孤立した彼は、かつての故郷に抛りどころを求めようとするが、すでに第I章で述べたように、故郷は消え去りつつあった。

両親のことをシュティルナーは、まるで死者のように想い起こすのだった。両親は生きている。しかし彼が近づくことのできない、別の場所に生きているのだ。彼がもう、二度と近づくことができないであろう場所に。[...] 彼には分かっていた。両親の寿命は、あとほんの数年だろう。せいぜい10年。彼は考えた。あの独裁者は、両親よりも長生きするだろう。そればかりか奴は、ドイツ人少数民族全体よりも長生きするだろう。そうなったらシュティルナーは、そのあとで、いったいどこへ帰郷すればいいのか？ 見知らぬ故郷へ？ そこで暮らしていた当時からすでに、あまりにも遠く離れたものになってしまっていた故郷へ？ そして今、日を追うごとにますます遠のいてゆく故郷へ？ あの故郷は、いつか完全に跡形もなく消え去ってしまうだろうか？ そうなったら俺はいったい誰なんだ？^{B17f.}

「歓迎祝金」を手にしたヴァーグナーが、その代償として失わなければならなかったものは、かけがえのないものばかりであった。故郷、民族のアイデンティティ、そして、これまで慣れ親しんできた言葉までもが、すべて価値を喪失したのである。人間としても、詩人としても、いわば根こそぎにされた彼は、新しい社会に順応し、新しいアイデンティティを確立し、新しいドイツ語を学ばねばならない。だが、35年間にわたって培われてきた自分のこれまでの半生を、別のものと取り替えることなどできようか。過去と現在の両方から切り離され、エア・ポケットのような「合間」^{B187}に落ち込んだまま、詩人の鋭敏な意識のなかで、ひとりぼっちの格闘が演じられるのである。

シュティルナーは、自分自身とは無縁の現在に生きていた。ここドイツでは、一切の事柄について、その由来が分からない。経験するすべてのことは、秘密に満ちたものに思われた。ここには不思議な言葉が数多くあった。彼はそうした言葉を、まるで暗記しようとするかのように、しばしばつぶやいた。不快な言葉も少なくなかった。とても口にはできないな、と彼は考えた。し

かし半年経ってみると、そう考えていたにもかかわらず、それらの言葉を口にしてのだった。まだ御し難いと思っていたのに、もう滑らかに口を突いて出てくる。彼は自分のドイツ語から離れ、別のドイツ語に近づいていった。自分の文章に耳を傾け、自分の構文と発音に注意を払った。ときたま彼は、ルーマニア語から翻訳された文章を、自分が話しているかのような感覚に襲われた。そこで念のため、それらの文章をルーマニア語に翻訳して確かめてみた。やれやれ、大丈夫だ。ルーマニア語に翻訳されたその文章は、本来のルーマニア語らしさを備えてはいなかった。つまり彼のドイツ語は、ルーマニア語からの翻訳ではなかったのだ。彼は、押し黙った土地で生きている自分の姿を眺めていた。そして、倦むことを知らずにささやき続ける、もうひとつの土地のことを考えていた。彼の内部には、はるか遠い土地の言葉があり、その言葉に彼は逆らおうと努めながら、心のどこかでは期待を寄せているのだった。^{B196}

こうした逡巡を繰り返しながら、主人公は、物語の末尾に至って初めて「悲しみ」(Trauer)という言葉に到達する。ありふれた言葉に思われるかもしれないが、彼にとっては、喪失したものの大きさ、重さを表現しうる唯一の究極的な言葉である。かけがえのない過去を捨て去るわけにはいかないが、人が生きるのは現在であり、過去ではない。過去と現在の「合間」に立ったまま身動きできない状態に、いつかは終止符を打たねばならない。ヴァーグナーは主人公とともに悲しい決断を下し、後半生へ向けて一歩踏み出そうとするのである。

シュティルナーは目の前に町を見た。そしてその町の背後に、まったく別のもうひとつの町、過去の町を見ていた。過去の町、それは大きくなりすぎてはいけませんが、消えてしまってもいけない。彼は過去の町を目の前に見ていた。彼はなにも云わなかった。そして、じっと動かなかった。まるで、目に見えないバランスを失うまいとするかのように。

そうだ、これは喪失の悲しみなんだ。彼は自分自身に云いさせた。

俺はここから動かないぞ。しかし、歩まねばならぬ。^{B208}

発掘： 【出国申請】の末尾でヴァーグナーが踏み出そうとした一歩は、決して生易しいものではない。前節の引用文に見られるように、「俺はいったい誰

なんだ？」という問いが、彼の困難な立場を表わしていよう。存在の基盤を求めても、自分の拠って立つべき足場が、どこにも見つからない。いうなれば彼は、誰でもない者になってしまったのである。

ヴァーグナーの3冊目の小説『ウィーンの土石流』（1990）には、作者と同様、「どこにも所属していない男」^{M18}が主人公として登場する。名はベンダ。この論文の最初の引用で示したように、30歳台半ばのエンジニアである。みずからのアイデンティティを求め、ウィーンの街をさまよう彼は、むろんヴァーグナーの分身であるが、これまで概観してきた二つの小説とは異なり、人物造型に当たっては、作者の友人の経歴も織り込まれている。時は1989年夏。妻と別れたベンダは、職を辞し、ミュンヘンを発ってウィーンへ向かう。そして、約2か月の滞在中、女子学生と恋仲になるが、やがて関係を断ち、ミュンヘンに戻る。およそこのような筋立てのなかで、主人公の内面の葛藤が描かれ、封印されていた彼の過去が明らかにされてゆく。

まず、主人公ベンダがおかれている立場について述べておこう。彼はバナート生まれのドイツ人で、11年前、国境を密かに越え、西側へやってきた異邦人である。以来、過去を完全に断ち切るかたちで、西ドイツ社会に適応しようと努めてきた。けれども、言葉の壁がどうしても越えられない。「生涯の最後の日まで、ぼくは自分の発音によって区別されるんだ」^{M30}と彼は云う。彼としては、断ち切られた過去とともに喪失した「心の拠りどころ」^{M29}を、結婚生活のなかに見出したつもりであったが、それは思い込みにすぎなかった。なるほど彼の妻は「同じドイツ語を話している。でも、ぼくのことを分かってはくれない」。西側で育った「彼女は異星人」^{M20}なのだ。お互いに理解し合うことができない二人の結婚生活は、彼女が西ドイツ生まれの男性のもとへ走ることによって破綻したのである。

心の拠りどころを失い、途方に暮れるベンダは、ふと思いついて、これまで訪れたことがなかったウィーンへ旅立つ^{M9}。作品のなかに、これといった理由は示されていないが、主人公にとっても、作者にとっても、やはり行く先はウィーンでなければならなかったろう。というのも、彼らの生まれ故郷バナートは、すでに述べたように失われている。また、ドイツは新しい故郷たりえない。だが、ウィーンはどうであろうか。ひょっとしたら、1918年までバナートを支配していたハプスブルク帝国の首都は、自分たちの拠りどころとなるのではあるまいか。ごくわずかではあるにしろ、まったく可能性がないわけではない。

もともと第一次大戦以前、バナートに住むドイツ人たちの視線は、ドイツばかりでなく、ハプスブルク帝国にも向けられていた。前章で触れたドイツ人作家の分会にしても、実はウィーンで活躍したバナート出身のドイツ人作家、アダム・ミュラー＝グッテンブルン（1852-1923）の名前に由来するものである。また、フラウエンドルファーが学んだギムナジウムは、ニコラウス＝レーナウ＝リュツェーウムと称し、ウィーンで没したバナート生まれの詩人、ニコラウス・レーナウ（1802-50）の名を冠している。さらに、ヴァーグナーの父方の親戚には、シュタイアーマルク出身者の末裔があるという^{M68}。おそらくヴァーグナーとしては、主人公とともに、かつての多民族国家の首都を訪れ、自分をつなぎとめるものが残っていないかどうか、みずからの目で確かめる必要があったのであろう。

ウィーンに到着したベンダは、市電の車内で交わされるハンガリー語の会話に耳を傾け、まるで自分がテメシュヴァールにいるかのような、懐かしい思いに浸っている^{M69}。また、ドイツにいるときと違って、ウィーンでは、発音の誤りを他人から指摘されても気にならない^{M70}。知り合った女子学生と恋仲になるのは^{M71}、失われた拠りどころを彼女、つまりはウィーンに見出そうとする願望の表われだろう。しかしベンダは、徐々に現実の世界に引き戻される。ウィーンで東欧崩壊の報せに接するのである。

ほく [=ベンダ] は西側との国境を目指して進んでゆく、東側の全市民を目の当たりにした。みんな、あの頃のほくと同じだった。もう、これまでだな、と思ったよ。土石流が生じ、人々が走り出す。命がけで走ってる。でも本当は、そのあとが問題なんだ。もちろん、こんなことを云ったって、どうしようもない […]。誰も聞いてはくれないさ。連中は走ってる途中なんだし、逃げれば助かると思い込んでいるんだから。しかし、彼らはあとで、崩らなきゃならない。逃げ延びた人間だって、実は生き埋め同然なんだから。崩れた土砂は残るのさ。みんな、いつかは、埋まってしまった自分自身を掘り起こさなくちゃならない。^{M72}

かつての多民族国家の首都という装いは、しょせんは西側の観光客のために偽装された過去であり、単なる虚構にすぎなかった^{M73}。この年の8月19日、ハンガリーのエーデンブルク（＝ショプロン）に集まった東ドイツ市民、およそ

千人がオーストリアへ脱出。9月11日にはハンガリー政府がオーストリアとの国境を開放。その後の経過は述べるまでもない。ベンダにとって、抛りどころを与えてくれるかに見えた古都ウィーンは、まもなく、東側から逃れてきた難民たちであふれかえる^{M134}。これまでの人生のすべてを、鉄のカーテンの向こう側に捨て去ってきた人々である。ベンダは、西側世界に向かって殺到する人の群れを眺めながら、やがて喪失の苦悩にさらされるであろう彼らの将来を思いやる。と同時に「あの頃のほく」、すなわち、忘れていた自分自身の過去を思い出すのである。

ベンダの脳裏に蘇ってきたのは、バナートに恋人を置き去りにしてきたことや^{M79}、国境で警備兵を殺したことなど^{M75}、10年以上にわたって無意識のうちに封じ込めてきた、辛い記憶の数々であった。その結果、彼はおよそ次のような認識に至るのである。いったん捨ててしまった故郷は、二度と取り戻すことができない。しかし、だからといって、過去から切り離された根無し草のままでは、「生き埋め同然」である。したがって、いつかは記憶の底で過去に立ち返り、葬り去られたかつての自分自身を、苦い思いで発掘しなければならない。そうすることによって初めて、目の前の現在を生きてゆくことができる。

つまり、ベンダにとっての抛りどころは、もはやルーマニアにも、ドイツにも、そしてオーストリアにもありえない。個人としての自分の記憶、これ以外に抛りどころはないのである。もちろん、どこにも所属しない人間として生きることに変わりはない。しかし、どこにも所属できないという否定的な意味においてではなく、自分以外の何者でもないという積極的な意識をもつ点が、同じ一步を踏み出すにしても、大きな違いとなって現われてこよう。作品の末尾でベンダは、ウィーンに着いたときは打って変わり、いわば毅然たる態度で、ミュンヘンへ向かう列車に乗り込むのである。

展望： ルーマニアにいた当時、もっぱら詩や小品を書いていたヴァーグナーは、1987年に出国して以来、小説というジャンルに力を注いできた。『出国申請』(88)、『歓迎祝金』(89)、『ウィーンの土石流』(90)、これまで取り上げてきた3作を振り返ってみると、いずれも言語の問題と並んで、アイデンティティの問題が絡んでいることに気づかされる。むろん両者は切り離せない問題であるが、仮に作家としてのヴァーグナーが、言語の問題を扱ってきたとすれば、アイデンティティの問題に取り組んできたのは、人生の半分を東側に捨て去っ

てきた、人間としての彼であろう。

さて、人間としてのヴァーグナーは、前節の末尾に述べたようなかたちで、作中人物とともに、ひとまずアイデンティティの危機を克服したようだ。その後の作品を眺めるかぎり、彼の立場に大きな変化は見られない。もちろん、89年の東欧改革、翌90年のドイツ再統一は、彼にとっても一大事件であった。4冊目の小説『ジャンカルロのトランク』（1993）のなかに、次のような語り手の台詞がある。

俺は西ベルリンに住んでたんだが、西ベルリンなんて、どっかへ消えちまった。ここは、ただのベルリンで、回りを囲んでいた壁は、今はもうありゃしない […]。1989年をもって地理学は役立たずになっちゃったのさ。なあ、いったい俺は、どこにいるんだろう？²⁰⁾

「こっちとあっち」、つまり世界を西側と東側に分けて考えてきた者にとって、89年秋以降の一連の事件は、世界観を揺るがす衝撃的なものだったろう。しかし、言葉の内容とは裏腹に、語り手にも、そして書き手たるヴァーグナーにも、どこかしら余裕が感じられるのである。なるほど、彼らの生まれはバナートであり、国籍は今や連邦共和国。ルーマニアとドイツに引き裂かれた存在にちがいない。だが、彼らにとっては、すでに以前から、つまり西側へ出国したとき以来、「地理学は役立たず」になってしまっているのである。彼らは自分たちのアイデンティティ、拠りどころを、もはや国家や土地に求めてはいない。ヴァーグナーの次の言葉も、これと同じ文脈で受けとめることができる。「ぼくはドイツ人であることを恥とは思わない。そしてまた、誇りにも思わない」²¹⁾。短い言葉だが、この述懐にたどりつくまで、彼は人生の半分を費やしたのである。

では、リヒャルト・ヴァーグナーという、名前についてはどうだろう。前章で述べたように、もともとは「文化上のアイデンティティのシンボル」であった。ドイツにやってきた当初は、おそらく重い十字架と化していたにちがいない。しかし今では、個人を識別するための「ただの名前」にすぎないようである。小品集『土砂崩れを集めた男』（1994）のなかから、『ウィーンで市電に乗った男』を訳してみた。苦い余韻を残す作品だが、ヴァーグナーの経歴を知らずに読めば、笑い話にもなりうるだろう。引用する側としては、彼が自分の名前

を種にして、このような小品を書けるようになったことに注目したい。作者の名前を外しては成り立たない一篇である。

ウィーンで市電に乗った男は市電に乗るのに十分な金を持っていなかった。しかたがないので不正乗車したら捕まった。ウィーン市交通局の年に一度の検札日だったのだ。男は市電から降ろされたが罰金が払えない。そこで係員たちは男の調書をとることにした。彼らは停留所に立っていた。名前は、と係員のひとりが訊く。男は自分の名前を云った。え、と係員が問い返す。男はもう一度自分の名前を云った。そりゃ、いったいどういう名前なんだね、まだなにも書き取ろうとせずに係員が訊く。ただの名前ですよ、と男は答えた。ただの名前だって、と係員が訊く。そう、ただの名前、と男は云った。あんなの名前かね、と係員が問いたです。ええ、わたしの名前です、と男は云った。ちょうどそのとき電車がやってきて、彼らの前に停まった。係員は帳面をパタンと閉じ、こりゃ駄目だ、と馬鹿にしたような仕草をすると、ふたりの同僚とともに市電に乗り込んだ。電車はただちに発車した。男は停留所を立ち去った。²¹⁾

ヴァーグナーは、最近の文章のなかでは、「東欧人」(Osteuropäer) ないし「中欧人」(Mitteleuropäer) と自称する場合が多い。過去の自分と現在の自分、いずれを念頭におくかによって使い分けているようだ。かつての「東欧人」として自分の過去を掘り起こしながら、これからは「中欧人」として現在の社会を批判する。今後の展望を描くとすれば、おそらくはこのような姿勢が、彼の作家としての立脚点になるであろう。実際に、最新作の長編『女たちの手のなかで』(1995) を読むと、移住者や外国人を排斥しようとする一般社会の風潮に対し、ひととき厳しい批判の目が注がれている。語りの口調も滑らかで、見かた次第では、散文家としての進境を云々すべきところかもしれない。

だが、自分自身の過去を掘り起こす作業は、なかなか厄介なようだ。書き手が傷つくのは当然であるし、存命中の他人も無傷では済まされないからである。たとえば、離別した二人目の妻について、「この作品のなかでは一言も触れないことにする」²²⁾と語り手は云う。現在ハンブルクに住んでいるヘルタ・ミュラーのことであろうと思われるが、書かねばならぬと念じつつ、いざとなると、やはり書きにくいのだろう。彼女に触れないということを、目についただけで

も6回、ヴァーグナーは語り手の口を通して繰り返している。

この作品『女たちの手のなかで』には、ベルトラムという名の、トトクを模したと思われる友人が登場する。74年春、いわゆる「協力者」として当局に「スカウト」されたトトクは、それ以来「グルッペ」の「最新の動向を、絶えず治安警察に情報として提供」²³⁾する役目を負わされていた。語り手は作品のなかで、ベルトラムに対する不信を隠さず、手厳しい非難の矛先を向けているが^{F157ff.}、トトクに関する事実が仮にそのとおりであったとしても、やり切れない話であろう。もともと全体主義国家では、親友同士の絆すら、絆たりえないのである。

さらにやり切れない話としては、やはりこれも離別した最初の妻が、実は治安警察のスパイだったというエピソードがある^{F161f.}。むろん作品のなかでの話であるから、あくまでも語り手の最初の妻のことであろう。作者本人の最初の妻であるなどは、どこにも書かれていない。読者としては、作者の私生活をあれこれのぞき込んでみたい気持ちを抑えがたいところだが、不用意な詮索は控えたほうがよさそうである。虚実の皮膜を精妙な手つきでさばっているつもりでも、ふと気がつくと、いつのまにか、したたかな作者の術中にはまりこみ、身動きがとれなくなってしまう場合がある。それも小説を読む楽しみだ、と開き直ってしまえばそれまでだが、だからといって、なにも急ぐことはないだろう。まだまだ作者は若くもあり、過去を発掘する作業は長い時間を必要とする。ここはひとつ、話が落ちてきたところで一息入れ、次作が手に入るのを楽しみに待つことにしたい。

註

- 1) この論考は、筆者による研究報告「ルーマニア生まれの作家リヒャルト・ヴァーグナーについて」(ドイツ現代文学研究会第28回ゼミナール・長野県北安曇郡八坂村・1996年8月29日)をもとにしている。ゼミナール参加者のみなさんからは、有益なアドバイスを多数いただいた。ここに記して、心よりの感謝を申し上げます。
- 2) おもなテキストは以下の通り。本文中に略記号とページ数を示す。

Wagner, Richard: *Ausreiseantrag. Begrüßungsgeld. Zwei Erzählungen.*

Frankfurt/M. 1991, c 1988, c 1989. [A]/[B]

Dsbe.: *Die Muren von Wien.* Roman. Frankfurt/M. 1990. [M]

Dsbe.: *In der Hand der Frauen.* Roman. Stuttgart 1995. [F]

- 3) バナートおよびルーマニアに関しては、おもに以下の文献を参照した。本文に挿入した地図は、Schulz-Vobach, S.58より転載したものである。なお、地名の表記に際しては、おおむねドイツ語名を用いることにした。

Der Sturz des Tyrannen. Rumänien und das Ende einer Diktatur.

Hrsg. v. Richard Wagner und Helmuth Frauendorfer. Reinbek 1990.

Die Demokratie der Nomenklatura. Zur gegenwärtigen Lage in Rumänien. Hrsg. vom Menschenrechtskomitee Rumänien in der Heinrich-Böll-Stiftung. Redaktion: Helmuth Frauendorfer. Köln 1991.

Wagner: *Sonderweg Rumänien.* Bericht aus einem Entwicklungsland. 2. Aufl. Berlin 1992, c 1991.

Dsbe.: *Völker ohne Signale.* Zum Epochenbruch in Osteuropa. Berlin 1992.

Schulz-Vobach, Klaus-Dieter: *Die Deutschen im Osten.* Vom Balkan bis Sibirien. Aktualisierte Ausg. München 1990, c 1989.

Basch-Ritter, Renate: *Österreich-Ungarn in Wort und Bild.* Menschen und Länder. Graz 1989.

- 4) ヴァーグナーに関する伝記的なことからについて、それが作品からの推測である場合には、その典拠を本文中に表示した。それ以外の記述に際しては、以下の資料を参照した。

Csejka, Gerhardt: *Richard Wagner.* In: KLG. Kritisches Lexikon zur deutschsprachigen Gegenwartsliteratur. Hrsg. v. Heinz Ludwig Arnold. München 1978.

Ein Pronomen ist verhaftet worden. Die frühen Jahre in Rumänien.

Texte der Aktionsgruppe Banat. Hrsg. v. Ernest Wichner. Frankfurt/M. 1992.

Totok, William: *Die Zwänge der Erinnerung.* Aufzeichnungen aus Rumänien. Hamburg 1988.

Autorenlexikon deutschsprachiger Literatur des 20. Jahrhunderts.

Hrsg. v. Manfred Brauneck. Überarb. u. erw. Neuausg. Reinbek 1991.

Deutsche Literatur. Ein Jahresüberblick. Hrsg. v. Volker Hage et al. Stuttgart 1982.

- 5) Vgl. Müller, Herta: *Der Mensch ist ein großer Fasan auf der Welt.*

Roman. Reinbek 1995, c 1986. Insbes. S.46f.,89ff. この小説の主人公夫婦と、ヴァーグナーの作品『歓迎祝金』における妻ザビーネ (=ヘルタ・ミュラー) の父母が、ほぼ同じ設定になっている。

- 6) Wagner : *Preface*. In : Dsbe. : Exit. A Romanian story. Translated by Quintin Hoare. London 1990. Translation of : Ausreiseantrag. S. vi.
- 7) Ebd. S. xvii.
- 8) Bossert, Rolf : *Vierzeiler*. In : Dsbe. : Auf der Milchstraße wieder kein Licht. Gedichte. Berlin 1986. S.14.
- 9) Wagner : *Nachtrag zur Dorfchronik*. In : Dsbe. : Das Auge des Feuilletons. Geschichten und Notizen. Cluj-Napoca 1984. Zitiert nach : Das Land am Nebentisch. Texte und Zeichen aus Siebenbürgen, dem Banat und den Orten versuchter Ankunft. Hrsg. v. Ernest Wichner. Leipzig 1993. S.80.
- 10) Wagner : *Der Große Chef*. Ceaușescu und die Macht. In : Der Sturz des Tyrannen. S.51.
- 11) Wagner : *Briefe*. In : Dsbe. : Schwarze Kreide. Gedichte. Frankfurt/M. 1991. S.42.
- 12) Krauss, Hannes : *Fremde Blicke*. Zur Prosa von Herta Müller und Richard Wagner. In : Neue Generation, neues Erzählen. Deutsche Prosa-Literatur der achtziger Jahre. Hrsg. v. Walter Delabar et al. Opladen 1993. S.74.
- 13) Wagner : *Die Aktionsgruppe Banat*. Versuch einer Selbstdarstellung. In : Dsbe. : Mythendämmerung. Einwürfe eines Mitteleuropäers. Berlin 1993. S.114.
- 14) Totok, William : *Rumänisierung*. Die Nationalitätenpolitik von 1918 bis 1990. In : Der Sturz des Tyrannen. S.125.
- 15) *Der Sturz des Tyrannen*. S.166.
- 16) Wagner : *Die Aktionsgruppe Banat*. In : Mythendämmerung. S.115.
- 17) Wagner : *Preface*. In : Exit. S.v.
- 18) Vgl. Müller, Herta : *Der ganze Name und ein halber Satz*. In : Der Sturz des Tyrannen. S.64ff. Vgl. auch : *Der Exitus der deutschsprachigen Literatur Rumäniens*. Ein Gespräch mit Rolf Bossert, geführt von

- Gisela Lerch am 11. 2. 1986. In : Totok : Die Zwänge der Erinnerung. S. 196.
- 19) Wagner : *Ich*. In : Mythendämmerung. S.7.
- 20) Wagner : *Giancarlos Koffer*. Berlin 1993. S.14.
- 21) Wagner : *Ich*. In : Mythendämmerung. S.11.
- 22) Wagner : *Der Mann, der in Wien Straßenbahn fuhr*. In : Dsbe. : Der Mann, der Erdrutsche sammelte. Geschichten. Stuttgart 1994. S.67.
- 23) Schlesak, Dieter : *Kulturpolitik mit Polizeieinsatz*. Marxistische Rumäniendeutsche stören die revolutionäre Ruhe ihres "sozialistischen" Staates. In : Totok: Die Zwänge der Erinnerung. S.182.

(1996年10月4日提出)